

特集「芸術と色彩」 Special Issue: Art and Color

19世紀『均衡』の色彩論,あるいは《調和の時》(1896)の失われたユートピア

19th Century Color Theories of “Equilibrium”, or The Lost Utopia of “The Time of Harmony”(1896)加藤 有希子
Yukiko Kato埼玉大学大学院人文社会科学研究科
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Saitama University

キーワード：均衡, 補色, 無政府主義, グラデーション

Keywords: equilibrium, complementary colors, anarchism, gradation

1. はじめに：なぜ「均衡」の色彩論か

この論文は、19世紀フランスの美学・科学・政治を「均衡 (équilibre)」の色彩論から読み解く。これから説明するように、とりわけ「均衡」の色彩論を採用した新印象派の画家たちは、1870年代初頭にフランスに成立した第三共和政により、現在の民主主義と消費社会の原点ともいえる社会を経験することになる。

この時代はいわゆる「マス／集団」の概念が使われだした時代であり、チャールズ・マッケイが『狂気とバブル』(1841)で鮮烈に描いたように、民主主義の勃興に伴う都市化や技術の発達の原因となり、集団による暴力や愚行が数多く行われるようになった時代である。そうした混乱期にあり、新たな時代の理想の秩序－美学・科学・政治を貫くような－となったのがマスのような「量」を制する「均衡」であった。

「均衡」は16世紀半ばの物理学の発達とともに誕生した比較的新しい概念であり、相対する2つ以上の力のバランスを意味し、物理学や心理学の分野で数学的な量化 (quantification) を行う際に使用されてきた¹⁾。その点で、もともと「継ぎ目」や「関節」を意味するギリシャ語の harmós から派生した、古典的で分節的な「調和 (harmonie)」の概念とは異なる。

この論文では、量のあいだでバランスをとる「均衡」の理想が、同時代の美学・科学・政治を貫いていたことを示していきたいが、それが当時の色彩論、とりわけ補色調和理論においてまさに結晶化されていたことをまずは見ていきたい。

2. 「均衡」の色彩論と新印象派のプラクシス

アメリカの科学者オグデン・ルードの主著『近代色彩論』(1879／仏訳1881)は、批評家のフェリクス・フェネオンや画家のジョルジュ・スーラらを通じて、新印象派の成立に最も直接的に影響を与えた理論である。ルードは言う。

ここで、[トマス・]ヤングの理論によれば、白の感

覚は網膜を構成する三つの神経線維がほぼ同じ程度の活動をするように刺激されたときに生まれる [...] 赤 [R] と青緑 [BG] は補色である。なぜなら赤は赤の視神経を刺激し、三つの視神経 [赤緑青 RGB] の協働 [joint action] は、白色光をもたらすからである²⁾。

補色残像の現象は、ヤングとヘルムホルツの理論の助けを借りれば、簡単に説明できる。先ほど記述した例を取り上げてみよう。私たちの理論では、小さな四辺形の紙から発せられた緑の光 [G] は、私たちの目に働きかけ、網膜の緑の視神経をある程度疲れさせる。一方、赤 [R] と紫の視神経はさほど影響を受けない。そこでその緑の紙が突然糸によって引っ張られてなくなると、グレーの [ニュートラルな] 光が疲れた網膜に届く。このグレーの光は、私たちが知る限り、赤と、緑と、紫の光 [Bに相当と考えられる] によって構成されている [RGB]。疲れていない赤 [R] と紫 [B] の神経は、その [グレーの光の] 刺激に強く反応する。一方、緑の視神経は、この新しい光に対してより弱い反応をする。その結果、私たちには、赤 [R] と紫 [B] が混ざった感覚、つまり最終的に赤紫 [マゼンタ] の [補色残像] が見える³⁾。

このような神経生理学に基づく色彩論は、色覚は三つの視神経 (現在で言うところの RGB) から成り立っているというトマス・ヤングの1801年の仮説から始まった。それを受け継いだルードはRGBの視神経がバランスよく働く「白色光」の状態を理想形と考え、それが崩れると、それを補填するために補色残像が現れると主張している。ここには色彩知覚を神経の「労働」として捉え、その「バランス／均衡」を整えるべきだという科学や美学を超えた一種の倫理観が働いている。

『近代色彩論』のフランス語訳 (1881) が出版される3年前の1878年、ルードがドイツ留学で多大な影響を受けたヘルマン・フォン・ヘルムホルツは「光学と絵画」の中で、視覚をまさしく労働として説明していた。

光によって私たちの眼はさまざまな程度で衰える。それは私たちが筋肉の弱体化に適応している疲労という現象である。私たちの神経システムの活動のあらゆる展開は、その活動の力を一時的にはあるが減少させる。筋肉は労働により疲労し、脳は思考と魂の感情によって疲労し、眼は光によって疲労し、光が強いほど、よりひどく疲労する⁴⁾。

アンソン・ラビンバックが詳らかにしたように、時間賃金労働が急速に普及した19世紀後半は、疲労は悪とされ、それをいかに避けるか、そして平等に分配するかが労働者の最大の関心事の一つであった⁵⁾。ヘルムホルツからルードに続く神経生理学的色彩論の系譜は、こうした当時の政治が科学や美学に反映され、貫かれた事例であった。

新印象派はこうした補色調和と均衡の美学と倫理を忠実に受け取った画派であった。彼らは絵画の中で補色を多用したことが知られているが、それ以外にも額縁を絵画本体の補色で塗ることを実践している。例えばスーラの《クロトワの風景》(1889)(図1)では、青い空の周りの額縁に補色の黄色が塗られ、緑の芝生には補色の赤い点描が付されている。1888年、新印象派のサポーターであった批評家のフェネオンはスーラの額縁と絵画との間の補色対比を「哲学的に白く、抽象的である〔philosophiquement blanc et abstrait〕」と述べている⁶⁾。この見解は、フェネオンの、そしておそらくスーラの、総計して白色光になる量化された「均衡」への関心の高さを明らかにしている。

3. 新印象派美学の背景にある「均衡」の政治学

19世紀後半、「均衡」の理想を最も追求したのが、一部の政治学者たちであった。新印象派にも近しかったテオドール・デュレやカミーユ・ピサロ、フェリクス・

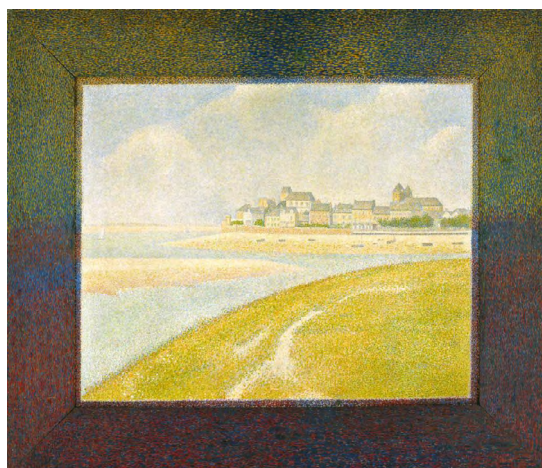


図1 ジョルジュ・スーラ《クロトワの風景》1889, 油彩, 70.49×86.68cm, デトロイト美術館

フェネオン、テオドール・ド・ウィゼワラの批評家や画家にも読まれていた、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサーの著作は、1870年代からフランスの読者に、「均衡」の理論を社会的な文脈からいち早く伝えていた。1877年に仏訳された『第一原理』(1862)の中で、彼は、「人間の発達、物理的なものから心理的、社会的なものに至るまで、すべての現象のあいだでの『至上の均衡』を実現するための努力である」と述べている⁷⁾。

また何より、新印象派が信奉していた無政府主義／アナキズムの政治理論家たちは、「均衡」をその政治原理の理想としていた。金山準も近著の中で詳らかにしているように、アナキズムの創始者ピエール・ジョセフ・プルードンは、とりわけ前期の思想で、「人間が目指すべき理念は『無限』の拡大や支配ではなく、その分裂した諸能力の『均衡』」であると随所で主張している⁸⁾。

また世間に最も影響力の強かったと言われる無政府主義者ピーター・クロボトキンは、広く読まれたリーフレット『無政府共産主義：その哲学と理想』(1896)のなかで、フォルマリズムを死んだ社会制度として拒絶し、絶えず化する「均衡」を理想の政治理念とする。

すでに確立された形式があり、それが法律により結晶化したような社会は、忌むべき社会である。社会は、さまざまな力の集まりと、あらゆる種類の影響との間で、絶えず変化し、移ろいやすい均衡のうちに、独自の道で調和を探っている⁹⁾。

新印象派はシニャックやピサロが無政府主義に深く傾倒しており、資金や版画などの作品をアナキストの団体に寄付していたことが知られているが¹⁰⁾、このように彼らに影響を与えた政治哲学の思想が、補色調和の色彩論に通じる「均衡」を理想の核心においていたのである。

4. シニャック《調和の時》(1896)：補色であらわされるユートピアとその限界

とはいえ、「均衡」の色彩論と政治学が重なるといったことが、現在の私たちには想像しにくいと思われるので、もう少し説明を補足する。19世紀半ばからヨーロッパの色彩論を牽引したイギリスの批評家ジョン・ラスキンは以下のように言う。

あなたはまた、彩色する力があなたの健康状態や心の正しいバランスに多くを負っていることを見出すだろう。あなたが疲れているとき、もしくは病気の

とき、あなたは色彩を的確に見ることができないだろう。そしてあなたが機嫌を損ねているとき、あなたは適切な色彩を選ぶことができないだろう。それだから、必ずしも個人の性格のテストとはならないまでも、彩色する力は国民の心の健康の重大なサインである。彼らが知的に下降状態にあるとき、その色彩はきまって冴えないものとなる¹¹⁾。

新印象派にも影響を与えたこのラスキンの色彩論は、色彩と政治のつながりを強く主張している。言い換えるなら、彩色がプラクシス(実践)として捉えられ、政治的倫理と直結しているのだ。

このような倫理・政治と色彩論が交差する典型的な作品として、新印象派ポール・シニャックの《調和(もしくは無政府主義)の時》、黄金時代は過去にあるのではない。それは未来にあるのだ(1895-96)がある(以下《調和の時》)。この絵画は、彼の友人の無政府主義者ジャン・グラヴに寄贈するために描かれたもので、シニャックとしてはそうした政治信条を背景としたユートピア絵画に仕上げたものだ。



図2 ポール・シニャック《調和の時》1894-1895、油彩、300 x 400 cm、モントルイユ市庁舎

この作品では、画面全体を通じて、対角線に補色が周到に配されている。青い海に対して黄色い地面、左上の緑の葉々に右下のオレンジの土、黄色い地面に紫の服……などである。そしてこの補色の調和、あるいは均衡の理想が、この絵画の登場人物の調和的理想と共鳴している。おのおの読書やダンスやボーリングに興ずる人々、そこにはアナーキズムの理想のようにリーダーがいない「理想」の社会が示されている。

この絵の微温的なユートピアを眺めると、20世紀、21世紀で最も重要でありながら、いまだ決定的道筋がない「エコロジー」のディスカールを思い浮かべずにはいられない。マーレー・ブックチン、アナ・ブラムウェル、ジョセフ・クラルツらも指摘しているように、

19世紀から20世紀にかけて最も成功した環境運動は、そのほとんどが急進的な左翼主義者たちに導かれていた¹²⁾。美術史研究のロビン・ロズラクは、無政府主義を「19世紀末のフランスとドイツで花開いた、比較的ゆるやかで、非党派的な、政治的エコロジストの一派である」としたうえで、新印象派美学がもつエコロジカルな性質を指摘している¹³⁾。

端的に言えば、シニャックのこの補色の美学と倫理を核として描かれた《調和の時》は、その均衡ゆえに刺激がなく、微温的であり、自然と協和したエコロジカルな側面が理想的に描かれるが、そこには出口がない。実際、発表当時、同時代の観衆からの反応は芳しくなく、ユートピア絵画というよりは「地中海岸でのピクニック」くらいに受け止められていた¹⁴⁾。また新印象派は20世紀初頭にアンリ・マティスらを通じてフォーヴにも影響を与えるが、しかし《調和の時》の完全無欠のユートピアは継承されることはなかった。

《調和の時》はそのタイトルでは「未来」を志向していたが、言ってみれば、そこで時が止まったような絵画だ。補色、均衡、エコロジー、安寧、リーダーのいない理想の社会—究極のバランスの中で絵画は静止した。この絵画は1810年にゲーテが補色調和論を提唱して以来の19世紀の色彩論を結晶化したものだったが、ヴァン・ゴッホの補色のように荒々しくはなく、時代を静かに代表していた。そしてこの20世紀転換期から、補色の美学、科学、政治、倫理は、次第に衰えるようになる。

5. おわりに：グラデーションの時代へ

色彩学者のジョン・ゲージがまとめているように、近代ヨーロッパの色彩調和理論は、1) ニュートンの「音階的」調和、2) ゲーテの補色調和、3) オストヴァルトの色立体におけるグラデーションの調和、の三段階で発展してきた¹⁵⁾。1810年のゲーテの色彩論を元に補色調和の理想は発展したが¹⁶⁾、化学者ヴィルヘルム・オストヴァルトが、1910年代半ばに対数関数に基づいたグラデーションの色彩オーダーを提示すると¹⁷⁾、補色調和説は次第に芸術の分野でその主導的な地位を失っていくことになる。

振り返れば、補色調和の時代に全盛だった無政府主義は、富の分配を目指していた。ブルードンやクロボトキンは、社会はエネルギーや生産物を欠いているのではなく、富をどのように個人に分配するかに問題を抱えていると考えていた。『労働者階級の政治的能力について』(1865)において、ブルードンは「できる限り良い生活を、できる限り多くの住人に保証するように食物を分配すること」の重要性を強調している¹⁸⁾。

クロボトキンも、「近代の悪魔の根源」が資本主義的な利益の余剰そのものではなく、余剰を労働者階級に分配するそのやり方のまずさにあると主張していた¹⁹⁾。

この正しい分配の理想は21世紀まで続く私たちの課題でもあるのだが、20世紀に始まるグラデーシオンの時代は、その理想を打ち砕くほどの「格差の時代」である。大量生産と大量消費が繰り返され、商品はグラデーシオンで色付けされるようになった。ジャン・ボードリヤールも指摘するように、こうした消費社会の中で、私たちはつい「パノプリ」(セット)でものを買ってしまう²⁰⁾。私たちの市場では、商品はグラデーシオンで色が付けられ、一つのもをかうと、隣のものも欲しくなる誘惑にかられる。

そして20世紀半ばのグラデーシオンの時代には、JAFCA (Japan Fashion Color Association) やINTER COLOR (国際流行色委員会) が、国内外で毎年流行色を発表するようになり、ピンクや白やベージュのグラデーシオンがさかんに商品化され売られるようになるのである²¹⁾。

補色の理想が対等な成員による平等な分配なら、グラデーシオンの理想は、消費社会の中で限りなく豊かに富を手にすることである。私たちはグラデーシオンよろしく、貧しい者はどんどん貧しくなり、豊かな者は天文学的に豊かになる。まさに社会構造がグラデーシオン化したのだ。

こういう時代の趨勢を考えると、シニャックの《調和の時》は、今こそ失われたユートピア絵画として光り輝く時かもしれない。

参考文献・注釈

- 1) TLFi (Le trésor de la langue française informatisé)
- 2) 加藤訳. Ogden N. Rood. *Modern Chromatics*. New York, 1973 (1879), p.176.
- 3) 加藤訳. Rood. *Ibid.*, p.237.
- 4) 加藤訳. Ernst Wilhelm von Brücke. *Principes scientifiques des beaux-arts, essais et fragments de théorie*. Paris, G. Baillièrre et cie, 1878, pp.190-191.
- 5) Anson Rabinbach. *The Human Motor: Energy, Fatigue, and the Origins of Modernity*. University of California Press, 1990.
- 6) Félix Fénéon. "Le néo-impressionnisme," *L'art moderne de Bruxelles*. 15 avril 1888.
- 7) Herbert Spencer. *First Principles*. New York: D. Appleton and Company, 1896 (1862) : Chapter XIX: the instability of the homogeneous (412) ; Chapter XX: The multiplication of effects (442) ; Chapter XXI: segregation (471) ; Chapter XXII: equilibration (496) ; Chapter XXIII: dissolution (531).
- 8) 金山準『プルドン —反「絶対」の探究』岩波書店, 2022, p.44.
- 9) Peter Kropotkin. *Anarchism: A Collection of Revolutionary Writings*. ed. Roger N. Baldwin, Dover, 2002 (1970), p.124.
- 10) Richard D. Sonn. *Anarchism and Cultural Politics in Find de Siècle France*. University of Nebraska Press, 1989, p. 141f.
- 11) 加藤訳. John Ruskin. *The Elements of Drawing*. Boston and New York: Colonial Press Company, 1909 (1857) section 182, pp.156-57.
- 12) Peter Marshall. *Demanding the Impossible: A History of Anarchism*. London, New York, Toronto and Sydney: Harper Perennial, 2008 (1992), p. 602. Murray Bookchin. *Post-scarcity Anarchism*, San Francisco: Ramparts Press, 1971. Anna Bramwell. *Ecology in the 20th Century: A History*. New Haven CT: Yale University Press, 1989, p.7.
- 13) Robyn S. Roslak, *Neo-Impressionism and Anarchism in Fin-de-Siècle France: Painting, Politics and Landscape*. Ashgate, 2007; p.19.
- 14) Margaret Werth. *The Joy of Life*. Berkeley, CA: University of California Press, 2002, pp.83-85.
- 15) John Gage. *Color and Meaning: Art, Science, and Symbolism*. Berkeley, CA: University of California Press, 1999 ; p.55.
- 16) Johann Wolfgang von Goethe. *Goethe's Color Theory*. ed. Rupprecht Matthaei, New York: Van Nostrand Reinhold, 1971 (1810).
- 17) Wilhelm Ostwald. *Color Science Part I*, trans. J. S. Taylor. London, 1931; ----. *Color Science Part II*, trans. J. S. Taylor, London, 1933.
- 18) Pierre-Joseph Proudhon. "On the Political Capacity of the Working Class" (1865) in his *Selected Writings of P.-J. Proudhon*, trans. Elisabeth Frazer, New York, 1969; pp.71-72.
- 19) Kropotkin. *Anarchism*. 2002 (1970) ; p.193.
- 20) ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司、塚原史訳、紀伊国屋書店、1995 (1970), pp. 13-14.
- 21) 日本色彩学会編『色彩科学講座2 カラー イン ライフ』朝倉書店、2006, p.137.